

## 小塚原刑場

児玉 寛嗣

目的地は南千住。約四十分のウォーキングで駅の西口まで来た。近くに大きなマンションが立ち並び、ショッピングモールやスーパーマーケットなどもあって、郊外のベットタウンの様相だ。人も多い。ここは郊外の街と比べて都心に近いという魅力がある。常磐線に加えて、地下鉄の日比谷線、つくばエクスプレスが乗り入れている。秋葉原には十分、霞が関まで二五分という利便さである。

近代的な街だが、歴史を遡るとその意外な面に驚く。

この辺りには江戸時代から明治初期にかけて大きな刑場があった。小塚原刑場とい品川近くの東海道沿いにあった鈴ヶ森と並んで大きなものだった。その痕跡は常磐線の線路を渡って反対側に出ると残っている。そこに延命寺というお寺があるが、境内は昔の刑場であった。山門を入ると身の丈三メートル以上もある大きな地蔵が目に入る。柔和な顔をしているが名前は恐ろしい。首切り地蔵と呼ばれている。掲げてある説明書によれば、寛保元年（一七四一年）に刑死者を供養するために建てられたとのことである。しかし、刑死体はそのまま放置されたり、申し訳程度に土を被せるのみであったらしい。夏になると周囲に臭気が充満、野犬やイタチなどが死体を食い散らかして地獄のような有様だったという。杉田玄白らが刑死者の解剖に立ち会ったのもこの場所だ。地下鉄の工事現場から多くの人骨が出てきて話題になったそつだ。

処刑された者は江戸時代を通じて延べ二十万人に達したとされている。平均すると年間千人近くが処刑されたことになる。ちなみに最近の日本の死刑執行数は年間五人ほどである。たとえ、いくら凶悪な犯罪が多かったとしても江戸時代には人の命は随分軽く扱われていたものである。中には冤罪のまま処刑された者も多かったです。

マンションの住人たちはこの歴史をどれほど知っているだろうか。そんな思いに耽っていると夏祭りの神輿を担ぐ人たちの威勢のよい掛け声が耳に入ってきた。